

32 『脈経』二十四脈状解析

— 『脈経』中における浮脈と他脈状の関係

中 川 俊 之

一、はじめに

『脈経』は、三世紀に成立したとされる脈書で、中国医学の脈診の原典と見なされている。ただ、『脈経』の脈診についての記載、たとえば脈状の記載を見ると、概ね断片的な条文が全巻に散見するという状態にあり、そこからは脈状の具体的様態はもちろんのこと、脈状の意味するもの(脈証)についてもなかなか判じがたい。ただ、巻第一冒頭に置かれた〈二十四脈状〉と通称される二十四種の脈状についての条文だけは、脈状の形状や脈状相互の関係づけも比較的はつきり記載されている。後代、この条文群のバリエーションが様々に展開されることになったのは、それらのもつ一種の体系性と関係がある。一方、〈二十四脈状〉部分以外の、『脈経』全巻に散見する

脈状に関する条文については、断章ということから、その背景や全体構造、相互関係も明かではなく、また実は前述の〈二十四脈状〉との関係すら明かではない。この部分をどう読むかという難問は、おそらく昔も今も変わっていないように思われる。そこで、筆者は『脈経』に散見する脈状関係条文には、概ね共通する背景や認識が存在するとの仮説をたて、先ず前述の〈二十四脈状〉条文を除く全巻より脈状関係条文を集め、その整理と解析を通して『脈経』中の脈状の体系的認識を明らかにしようとして試みた。その際、〈二十四脈状〉の体系は、当面、ここで明らかにしようとする体系とは相対的に異なるものとみなし、解析の参考とするにとどめた。

二、解析対象

本発表では、〈二十四脈状〉の一つでもある浮脈を対象とし、その脈証を明らかにするとともに、浮脈とそれ以外の脈状との関係についても検討を加えた。

三、解析結果

1、浮脈と俱に見える脈状の種類と脈証

①『脈経』において、浮脈と見える〈二十四脈状〉の所

出条文数は以下の通り（三脈以上の記載は各々の脈状数に加算）。

数（22条）、緊（19条）、滑（14条）、弱（14条）、瀯（11条）、緩（9条）、洪（6条）、遲（5条）、虚（5条）、弦（4条）、微（5条）、軟（3条）、革（2条）、細（2条）、動（2条）、芤（1条）、結（1条）、実（1条）、散（1条）。

数脈、緊脈、滑脈、弱脈がその大半を占める。△二十四脈状△では「極軟而沈細」として沈脈の類に属する弱脈が14条と多く見える。また、△二十四脈状△以外であるが、大脈は37条と多く見られ、浮脈の理解に欠かせない。△二十四脈状△中で浮脈と俱に見えない脈状は、沈脈、伏脈、促脈、代脈の四脈状である。

②二脈で表される脈状の脈証による分類は以下の通りである。大別して、傷寒、風寒に起因するもの（一～四群）と、傷飲、下痢に起因するもの（五群）に分類される（三脈以上の記載のみに見える弦脈、遲脈、実脈、脈証のはっきりしない動脈、結脈、散脈は除く）。

一群（42状）・浮大（傷寒熱盛）、浮洪（傷寒）、浮数（発熱）、

浮滑（外熱）。

二群（19条）・浮緊（身体疼痛）。

三群（14条）・浮弱（外証未解・当以汗解）。

四群（9条）・浮緩（風寒入肌肉）。

五群（21条）・微浮（胸中有寒）、浮瀯（五臟無精）、浮細（傷飲）、浮虚（泄利）、浮革（腸鳴）、浮芤（其陽則絶）。

（日本鍼灸研究会）